

高専生と読む「論語」 ——プレゼンテーションを取り入れた低学年漢文の授業——

宇部工業高等専門学校 ○畑村 学

1. はじめに

今回紹介するのは、筆者が平成 22 年度以降、本格的に実施している 1・2 年生の漢文の授業において学生のプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を向上させる取り組みである。

古典の授業は、文法事項の説明、文章の読解、口語訳の作成といった形体で行われるのが一般的であり、それは高校に限らず高専でも同様であろう。他高専のホームページで公開されている古典の授業のシラバスを見る限り、上記のスタイルで行われている授業がほとんどであった。

高専における国語の授業は、「日本語によるコミュニケーション能力」を習得するための科目として位置づけられているとはいえ、そうした能力は現代文や日本語表現といった「現代語」で書かれた教材を扱う授業で習得するものであり、古典は国語の科目の一つだが、コミュニケーション教育とは切り離された形で行われてきたと言えよう。

煩瑣な文法事項の説明は、受験校などでは必須であろうが、3 年次に大学受験をしない高専生にとってはさほど重要ではない。それらは内容の読解に必要な程度にすませ、むしろ高専生が劣っているとされる「コミュニケーション能力」や「協調性」「行動力」といった能力の向上を図る方が、より重要ではなかろうか^{注1)}。

以上のような考えから、これまで筆者が現代文や日本語表現の授業で行ってきた学生のコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を向上させる取り組みを漢文の授業において行うことにした次第である。

以下、主として平成 22 年度に 1 年生のクラスで行った漢文の授業（通年、1 回 50 分）での取り組みの一部を紹介することにしたい。

2. 授業の紹介

2.1 名前の漢字を調べよう！

前期の比較的早い時期に行ったのは、自分の名前に使われている漢字一字について漢和辞典やインターネットを使って調べ、それを「図解資料」にして 4 人グループで発表するというものである。

4 月の授業では、漢文訓読の基礎を短文や故事を通じて学習する。そうした授業のなかで、漢字の成

り立ち（部首と旁、六書など）についても簡単に説明した。さらに、日常的に使う生きた言語として漢字を身近に感じ、漢字に対する興味や関心を深めさせることを目的に、自分の名前に使われている漢字を調べ、調べたことを「図解資料」にまとめてプレゼンテーション（以下、プレゼンと略称を用いる）させることにした。

まずは事前準備として、「調査用プリント」（A 3 用紙）を利用して各自で漢和辞典やインターネットなどを使って名前の中の漢字一字について詳しく調べる。調べるのは以下の項目である。

- ① 異体字
- ② 読み方、意味
- ③ 成り立ち
- ④ 熟語、成句
- ⑤ とっておきの情報

今の学生には紙の辞書を持っている者はほとんどいないが、電子辞書は入学時に 7～8 割の学生が購入しており、学生はそのなかに収録されている漢和辞典を利用することが可能である。また、⑤ とっておきの情報がなかなか見つからない場合は、筆者の研究室や図書館にある「字通」や「大漢和」などを使って調査した学生もいた。

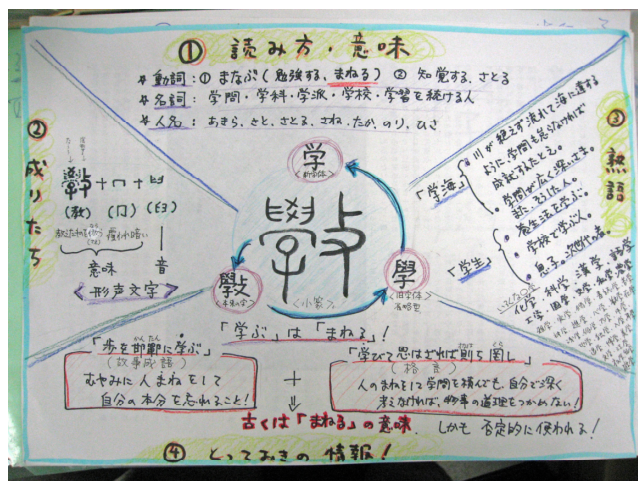


図 1 「名前の漢字を調べよう」図解資料

「調査用プリント」に整理した情報は、そのなかから聴き手に伝えるのに相応しい内容をピックアップして手書きの「図解資料」（A 4 用紙×1 枚）と

【連絡先】〒755-8555 山口県宇部市常盤台 2-14-1 宇部工業高等専門学校 一般科

畑村 学 TEL: 0836-35-7660 FAX: 0836-35-5469 e-mail: hatamura@ube-k.ac.jp

【キーワード】コミュニケーション能力、漢文、図解

してまとめる（図1参照）。「図解資料」とは、丸や四角などの図形、矢印などの記号、キーワードを用いて話す内容をまとめたものである。強調したい内容について、図形やフォントを工夫して整理し、聴き手の視覚に訴えることで、言葉だけでは伝わりにくい内容をスムーズかつ正確に伝達することが可能となる。

図解については、効果的なコミュニケーションのツールとして、これまでもスピーチやプレゼンの授業で積極的に利用してきた¹⁾。人前で話し慣れていない学生にとっては、話す内容だけでなく話す順番も整理された図解資料は、聴き手の視線を資料に向けて顔に視線が集中するのを回避できるため、緊張を緩和し、話すことへの抵抗感を軽減させる効果もある。漢文の授業で行うプレゼンでも、この図解資料を活用することにした。

調査用プリントと図解資料の作成は、いずれもレポート課題とした。作成の方法については、通常の授業の中で各1回、10～15分の時間を使って説明した。

プレゼンは1人1分30秒～2分で、50分の授業を使って行った。その際、まず練習として2人組で人を変えて3度プレゼンを行い、その後4～5人グループで本番を行った。全員終了後、話し方、図解資料の完成度、図解資料の使い方、良い聴き手などの項目毎にグループの1位を決定した。

クラス全員の前でプレゼンさせるという方法もあるが、人前で話し慣れていない学生には、クラス全員の前でスピーチやプレゼンを行うことに強い拒否反応を示す者もいる。また、1回の授業が50分という時間的な制約もある。そうした条件下では、少人数グループで繰り返し行うやりの方が、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を向上させるには効果的であると考えた。

2.2 論語プレゼン

後期に入り、「論語」の授業を終えた後に行ったのが「論語プレゼン」である。これは、「論語」の一章を各自で調査し、調査内容を「図解資料」にまとめ、それを用いてプレゼンを行うというものである。手順やプレゼンの方法は、前期に行った「名前の漢字を調べよう」とほぼ同じである。

学生は、まず筆者が作成した「論語の名句一覧」から調べたい一章を先着順で選ぶ。「一覧」には「論語」の名句50編を掲載し、学生が選びやすいように（1）よりよく生きるために、（2）学ぶことの大切さ、（3）人づき合いのコツと、内容で3つに分類した。

選んだ一章については、「調査用プリント」を使い、下記の項目を調査させた。

- ① 論語の本文、書き下し文、現代語訳
- ② この話のポイントを一言でいうと何か？
- ③ どんな状況で語られた言葉と考えられるか？
- ④ 孔子の考えに賛成・反対？その理由は？
- ⑤ 今の自分（たち）や社会に当てはめると？
- ⑥ その他、調べてわかったこと、気付いたこと

調べた内容は「図解資料」にレポート課題としてまとめ、翌週に図解資料を使ってプレゼンを行った。評価項目や方法などは省略する。



図2 「論語プレゼン」の授業風景

3. 今後の予定と課題

以上紹介した漢文の授業でコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を向上させる取り組みは、年度末に実施した授業アンケートの結果から、学生から高い評価を得たことが確認できた。

また、古典の授業でコミュニケーション能力を向上させる取り組みは、教室会議で筆者が提案し、平成23年度は国語科全体で取り組むことになった。今年度は他の国語教員が担当する古文や漢文の授業でも、学生同士の話し合いやスピーチ等コミュニケーション能力を向上させる取り組みが行われることになったのである。

筆者自身としては、今年度は2年生の漢文を担当しており、昨年度の実践を踏まえ、新たに「思想教材と意見文」（孔子や老子の考えに対し、根拠を示しながら自分の意見を200字で記す）を実施しており、後期には「歴史教材の脚本化」（「史記」や「十八史略」のシナリオ化と朗読劇）を計画している。

脚注

注1) みずほ情報総研株式会社：『高等専門学校
のあり方に関する調査報告書』、2006年3月

参考文献

- 1) 畑村学：「図解力」を鍛えるープレゼンテーションスキルを磨く国語の授業ー，論文集「高専教育」，第30号，pp.463-468（2007）

附記

本報告は、平成22年度豊橋技術科学大学高専連携教育研究プロジェクト「技術者教育における日本語コミュニケーション能力向上メソッドの開発とデータベース化」の研究成果の一部である。